高山寺経蔵典籍における古辞書利用

池田　証寿

一　はじめに

原本玉篇、篆隷万象名義、倭名類聚抄、類聚名義抄など、高山寺本として世に知られる古辞書が多いことはよく知られているが、中国及び日本撰述の古辞書を利用した跡が現在の高山寺経蔵の典籍の中にその引用文の形式で数多く残されている。その引用文、すなわち古辞書逸文を通して見た高山寺経蔵典籍における古辞書利用に関しては、既にかなりの研究が積み重ねられている。

築島裕（一九六九、一九八八）は改編本系類聚名義抄の逸文に基づき、改編本系類聚名義抄の成立と受容の様相を論じたものであるが、そこにおいて引用の最古の例として菩提場所説一字頂輪王経（第一部32号）の書き入れが存することが指摘されている。

白藤礼幸（一九八〇）は「古辞書史上の高山寺」「高山寺古目録にみえる辞書群」「高山寺における古辞書利用」の三章に分けて高山寺の古辞書を俯瞰するが、その最後の章において、高山寺の典籍における古辞書の利用の実例を掲げて、「高山寺の古辞書群には、玄証の影が濃いように思われる」という興味深い見解を示している。

宮澤俊雅（一九八〇）に始まる一連の論考は、極めて多数の逸文を収集しており、有益である。

近藤泰弘（一九八〇）には特に本草関係の辞書的な記述をまとめた箇所がある。

三保忠夫（一九八八、一九八九）は、白藤（一九八〇）が指摘した「玄証の影」を新撰字鏡の利用に着目して実証しようとした論である。

月本雅幸（一九八九）は、不動立印儀軌鈔を紹介した論であるが、玉篇と一切経類音決の逸文を紹介している。一切経類音決は、字様として、また図書寮本類聚名義抄の出典の一つとして注目される文献である（関連の論考は池田証寿（一九九五）を参照）。なお、一切経類音決は孔雀経音義（第一部233号）にも一条の引用が見えることが沖森卓也（一九八〇）に指摘されている。

土井光祐（一九九四）は、起信論本疏聴集記（大日本仏教全書本）に基づき、聞書の注釈書化と古辞書の利用を論じたものである。

訓点資料と注釈書との関係を通して、その訓読や音読を論じた研究に範囲を広げれば、沼本克明（一九八〇a、一九八〇b）、白藤礼幸（一九九〇）、松本光隆（一九九二）、小助川貞次（一九九七）などを挙げることができる。

本稿は、先学の驥尾に付して、高山寺経蔵典籍所引の古辞書逸文について若干の考察を加えようとするものである。

二　逸文収集及び記載の方法

逸文の収集にあたってはおよそ次のような方針によった。(1)できる限り先学の言及のない逸文を探索し紹介する。(2)平安鎌倉時代の文献を中心とする。(3)紹介済みの文献でも重要度が高いものは翻刻して再検討する。

逸文の記載の方法はおよそ次のとおりである。(1)記載の順序は、高山寺本の部・函・号番号とする。(2)書誌等は目録の記載を摘記する。(3)本文及び書き入れの逸文はできるだけ原本の体裁を再現するように心掛ける。(4)印刷の都合で漢字を通行の字体に直し、改行を／、「〻」を「々」で示すなど、変更を加えたところがある。

参考にした主な字書・韻書と所拠のテキストは次のとおりである。

広韻は、『校正宋本廣韻』（藝文印書館、一九八一年校正五版）所収の澤存堂本。切韻諸本は反切を上田正（一九七五）により転記し、必要に応じて劉復等編『十韵彙編』（台湾学生書局、一九七三年三版）、上田（一九八四）を参看した。

玉篇逸文に関しては岡井慎吾（一九三三）、馬渕和夫（一九五二）など。原本玉篇は東方文化学院の覆製本により、万象名義は『高山寺古辞書資料第一』（東京大学出版会、一九七七年）による。宋本玉篇は『大廣益會玉篇』（中華書局、一九八七年）所収の澤存堂本による。新撰字鏡は『天治本新撰字鏡増訂版』（臨川書店、一九七八年）による。図書寮本類聚名義抄は勉誠社の覆製本、観智院本類聚名義抄は風間書房の覆製本による。

三　第一部

○金剛頂一切如来真実摂大乗現証大教王経第二・三（二巻、第一部第1号）

〔書誌等〕［1］巻第二。院政初期写、巻子本、「高山寺」朱印、墨界、朱点（仮名、ヲコト点・中院僧正点、寛治二年（一〇八八））、墨点（仮名、院政初期）、薄朱点（仮名、院政初期）、原表紙、（尾題）「金剛頂瑜伽経巻第二」（奥書）月院之／真典院本也

〔本文〕倨傲（コカウにて）而按行（ホコリて）

〔下欄朱〕上去預反下／五到反ーー（倨傲）不敬皃也

〔考察〕◇**倨**　広韻「倨傲（據、居御切）」（去声御韻、見三。王一、王二、王三、唐「居御」）、万象名義「居豫反不敬也」（一51オ3）、宋本玉篇なし。◇**傲**　広韻「慢也倨也説文作敖餘傲此五到切八」（去声号韻、疑一。王一、王二、王三、唐「五到」）、万象名義「伍到反慢也傷也倨也」（一51オ3）、宋本玉篇「五到切書云瞽子父頑母嚚象傲傲不友」（上25オ）、龍龕手鏡「正五到反ー慢也倨也蕩也不敬也四」（33）。玄応音義は「倨傲」を見出しに掲げて「居預反下五到反説文倨不遜也傲不恭敬也広雅倨傲傷慢也」（二三684 8）と類似するが、「不敬皃也」は見えない。

〔書誌等〕［2］巻第三。体裁等［1］に同じ。墨点・薄朱点なし。（尾題）「金剛頂瑜伽経巻第三」（奥書）（朱書）寛治二年十月四日點畢於高野中院御坊以小野僧正御傳本／同年十二月五日受學了　金剛峯寺末葉弟子僧賢範本」（別筆）「傳持僧證印」

〔本文〕則以緋繒（赤ヒ）を「甬（ヨ）絡（せよ）。被（スルに）以（て）緋帛（ヒ）を覆（へ）面（に）令（て）弟子（に）結（に）薩

埵金剛印を以よ此心を。

〔上欄朱〕餘勇反量／器也正也／□□也□也

〔裏書朱〕甬（メクラシ）-絡（カフラシムルニ）

〔考察〕◇**甬**　広韻「草花欲發皃亦甬道周禮云舞上謂之甬甬鍾柄（勇、余隴切）」（上声腫韻、羊四。切三、王一、王二、王三「余隴」）、万象名義「餘種反鍾柄也使也常也」（四71ウ1）、宋本玉篇「餘隴切鍾柄也又斛也」（中40ウ）、玄応音義なし。典拠未詳。

○聖賀野紇哩縛大威怒王立成大神驗供養念誦儀軌法品巻上・下（二帖、第一部23号）

〔書誌等〕［1］平安時代寛治八年（一〇九三）写、粘葉装枡型、「高山寺」朱印、押界、朱点（仮名、ヲコト点・円堂点、院政初期）、原表紙、（外題）「馬頭尊儀軌巻上」（奥書）寛治八年二月二日書畢之

〔本文〕謂害怨耐

〔耐の右下〕乃代反

〔考察〕◇**耐**　広韻「忍也奴代切七」（去声代韻）、万象名義「乃代反能也耐字」（六115オ5）、宋本玉篇「奴代切能也任也説文曰…（下51ウ）、玄応音義「奴代反」（二二625 6）。

○甘露軍荼利菩薩供養念誦成就儀軌（一帖、第一部27号）

〔書誌等〕平安時代延久六年（一〇七四）写、浄秀筆、粘葉装、「高山寺」朱印、押界、朱点（仮名、ヲコト点・東大寺三論集点、平安後期）、原表紙、（外題）「臺廿七」（外題）「甘露軍荼利明王儀軌（奥書）（朱書）「傳受了僧浄秀」願以書写功　往生安養界／延久六年歳次甲寅六月十六日書写了高野末葉僧浄秀（別筆）「長治元年（一一〇四）五月廿七日傳受了僧快助／同受因幡君」

〔本文〕流沃甘露水

〔右朱〕烏酷反□水也

〔考察〕◇**沃**　広韻「灌也…烏酷切七」（入声沃韻、影一。切三、王一、王二、王三、唐「烏酷」）、万象名義「渶於吉反灌也美也沃同上」（五93オ5）、宋本玉篇「渶於酷切漑灌也柔也潰也沃同上」（中72ウ）、玄応音義「烏木反」（一32 2）。切韻、広韻に反切が一致。

〔本文〕水色如珂雪淋（林音）（平）灘（リン）（去）秋雨

〔上欄朱〕力尋反／水深也

〔考察〕◇灘　広韻「以水沃也（林、力尋切）」（平声侵韻、来三。切三、王二、王三、S6187「力尋」）。万象名義「力余反以水沃物」（五99オ4）。宋本玉篇「力金切水澆也亦雨淋淋下」（中76オ）。玄応音義「力金反」（二116 3）等。

切韻、広韻に反切が一致。「深」は「渶」の誤写か。

〔本文〕四-跳（テウ）（平）ヲトル　ホトハシレリ

〔考察〕◇**跳**　広韻「躍也（迢、徒聊切）」（平声蕭韻、定四。切三、王一、王三「徒聊」）、図書寮本類聚名義抄「音條（テウ）東云躍也（略）ホトハシル（上上上上平）集　ヲトル（上上平）」（111 1）、観智院本類聚名義抄「音迢（去）ヲトル（上上濁○）　ホトハシル（上上上○○）（略）」（法上79）。

偶然かもしれないが、書き込まれた二つの和訓が類聚名義抄と共通する点は興味を引く。

〔本文〕鈿-鈿之寶

〔右朱〕音田金花也

〔考察〕◇**鈿**　広韻「金花也又音甸（田、徒年切）」（平声先韻、定開四。切三、王三「徒賢」。P2014-3「徒天」）、「寶鈿以寶飾器又音田（電、堂練切）」（去声霰韻、定開四。王一、王二、王三「堂見」。唐「唐練」）、万象名義なし、宋本玉篇「徒練切金花也又音田」（中63ウ）、玄応音義「徒堅反」（二二613）。類音注は切韻、広韻の小韻字に合致。義注も切韻、広韻に一致。

〔本文〕焼-焯

〔右朱〕之若反火氣也

〔考察〕◇焯　広韻「火氣（灼、之若切）」（入声藥韻、章開三。王三、P3799「之藥」、切三「之爍」、唐「之若」）、万象名義「之藥反明也」（五138ウ3）、宋本玉篇「之藥切明也」（下7オ）、玄応音義「之藥反」（一三302）。

音注と義注は広韻に合致。唐韻の義注も「火氣」とある。

〔本文〕色如虹-霓（コロケイ）

〔右朱〕□或丑号（ママ）反仙人也五結反雄虹也

〔考察〕◇**霓**　広韻「似蟬而小（倪、五稽切）」（平声齊韻）、「虹又音倪（詣、五計切）」（去声霽韻）、「虹又音倪（齧、五結切）」（入声屑韻）。万象名義「五奚反又五結反雲色似龍」（五114オ2）、宋本玉篇「五奚五結二切雲色似龍也」（中82オ）。「丑号反」は「五兮反」の誤写。切韻諸本では「五嵇反」（切三、王三）、「五兮反」（P2015-2）と見え、後者に一致。P2015-2には「蜩々又入」とある。

〔本文〕色如皓-素（カウソ）

〔左朱〕胡老反索白也

〔考察〕◇**皓**　広韻「光也明也日出皃也胡老切十六」（上声晧韻、匣一。切三、王一、王三、P3693「胡老」）、万象名義「胡老反明也」（五122オ4）、宋本玉篇「戸老切日出也明也」（中85ウ）、玄応音義「胡老反」（七432上）。

「淋」「鈿」「焯」「霓」は切韻系韻書よるか。

四　第二部

○大聖妙吉祥菩薩説除災教令法輪（一巻、第二部256号）

〔書誌等〕平安時代寛治六年（一〇九二）写、巻子本、「高山寺」朱印、墨界、朱点（仮名、ヲコト点・西墓点、院政期）、表紙新補、（奥書）寛治六年七月二日書之（墨筆別筆）「長久二年九月十八日甲子於庚山房奉讀了／證惠點本日記也（奥書又別筆）「以西蓮房本點了／讃點本有之」

〔本文〕諸虫毒蜇-テチ（入）之類

〔右朱〕陟列反螫也

〔考察〕◇蜇　広韻「螫也亦作蛆（哲、陟列切）」（入声薛韻、端開三。切三、王二、王三、唐「陟列」）。万象名義なし。宋本玉篇なし。玄応音義「知列反」（二121）。切韻系韻書によるか。

〔本文〕若是（れ）地壇（のは）便須（く）除剗-（平）掃（去）去（して）送於長流浄水中（に）。

〔右朱〕楚間反削也

〔考察〕◇剗　広韻「剗削初限切六」（上声産韻、初開二。切一、切三、王三「初限」。P2014-8「初産」）、万象名義「楚間反削也平也」（五46ウ5）、宋本玉篇「楚間切剗削也」（中59ウ）。玄応音義「初簡反」「初限反」「初眼反」等。

これは音注、義注とも玉篇に一致。

〔本文〕 或(は)處幽(平)閨(平)禁(平)約(入)て

〔右朱〕 於略反儉

〔考察〕 ◇**約**　広韻「約束也儉也少也又姓（略）於略切又於笑切三」（入声藥韻、影開三。王二、王三、唐、P3799「於略」）、万象名義「於略反小也檢薄也纏也束也縄也縮也窮也」（六129オ5）、宋本玉篇「於略切少也儉也薄也束也纏也又於妙切」（下56オ）、玄応音義なし。

〔本文〕 又於一水盆の中に着て種々の甘美の飲食、菓子、甜(平)脆(去)等を皆須く擘せむこと碎くて誦して施-焔口の真言を起て慈悲心を加持すること三七遍、

〔下欄朱〕 蒲□(魂か)反訓缶モタヒノタクヒ

〔下欄朱〕 □(補か)革反破裂也□

〔考察〕 ◇**盆**　広韻「瓦器（略）蒲奔切四」（平声魂韻、並一。切三「蒲奔。王三「蒲昆」）、万象名義「蒲魂反器」（五21オ3）、玄応音義なし。

◇**擘**　広韻「分擘（檗、博厄切）」（入声麦韻、幫二。切三、王一、王二、唐、P5531-4「博厄」）、万象名義「補革反撝也分也」（二37ウ3）、宋本玉篇「補革反擘裂也」（上59オ）、玄応音義「補麥反」（二五721）等。

○蘇悉地羯羅供養法巻第一・二（二帖、第二部362号）

〔書誌等〕　［1］巻第一。平安後期写、粘葉装枡型、「高山寺」朱印、押界、朱点（仮名、ヲコト点・第五群点、天喜三年（一〇五五）、平源点）、原表紙、（表紙）「臺廿七」（外題）「蘇悉地法巻上」（奥書）（朱）「同四ー十月三日移點了　傳授師三嶋聖」／天喜三年歳次乙未九月七日於筑前國（墨抹消）夜須楢原山寺書了／僧平源之本（追筆）「三校了」

〔本文〕 五指を之の罅(ハサマ)相博(ツケヨ)。

〔欄外〕 罅　呼亞反石ー也蒋魴云呼訝反ー孔隙也又□秘分水□□云悠ー草蔓底(ハサ)濺ー石ー裏(カケタル サケタル)云々

〔考察〕 ◇**罅**　広韻「孔罅（嚇、呼訝切）」（去声禡、暁開二。王一、王二、王三「呼訝」）、万象名義「呼嫁反裂武也」（五27オ3）、新撰字鏡玉篇部分「呼格呼訝二反孔罅也」[1]（五15ウ）、宋本玉篇「呼嫁切裂也」（中53ウ）、玄応音義「呼嫁反」（九175ウ6）「…呼亞反説文罅裂也拆也」（十四351ウ6）等。

注文形式から見て、蒋魴切韻を直接引用したというより、東宮切韻によったかと推定される。

〔書誌等〕　［2］巻二。体裁等［1］に同じ。（奥書）（朱）「天喜四ー甲申十月四日移點了　傳授師三嶋聖／僧平源之本」

〔行間〕 橛　巨月反椿心也／渉沙也橛也ー／橛字也

〔考察〕 ◇橛　広韻なし、万象名義「渠月反株山名」（四22ウ5）、宋本玉篇「渠月切橛株山名亦作槩」（中20ウ）。◇撅　広韻「採撅亦樗蒲三采名（其月切）」（入声月韻）、万象名義「居越反擊也抜也掲也衣也掻也張也枝也」（二40オ3）、宋本玉篇「居越切説文曰手有所把也」（上60ウ）。「椿」は「椿」の誤か。

○大毘盧遮那経広大成就儀軌巻下（尾題）（一帖、第二部363—2）

〔書誌等〕　院政期写、粘葉装枡型、「高山寺」朱印、押界、朱点（仮名、ヲコト点・宝幢院点、永久六年（一一一八）、墨点（仮名、院政期）、原表

---

[1] 「呼格」は不審。「訝」は原本では旁を「耳」に作る。

紙、（表紙）（朱書）「真第五箱」（外題）「胎蔵界儀軌下」（奥書）（別筆追筆）「同年同」（別筆）「月二日奉受了」永久六年正月廿一日「□□闍利共□奉受了／□覚」（以上十数字抹消）（又別筆）「仁安二年十月朔日於観音寺恵真／供傳受了」

〔本文〕 朱（去）シュ 黷シ＞ナルコト猶し 刧火ノの」

〔本文右朱〕 之忍反

〔上欄朱〕 黷烏閑反染也又軫／音又之忍反／黒美髪也

〔考察〕 ◇黷　広韻「染色黒也烏閑切五」（平声山韻、影開二。切三、王三「烏閑」）、「黒皃（軫、章忍切）」（上声軫韻、章開三。切一、切三、王二、王三「之忍」）、万象名義「之忍反承髪」（五146オ6）、「之忍反美髪」（五147オ3）、宋本玉篇「之忍切美髪也」（下9ウ）、玄応音義なし。

〔本文〕 寂蝎トカツト 弓秤ショウト 宮

〔右朱〕 齒證反昌凌反平斤両者去聲

〔考察〕 ◇**秤**　広韻「稱惬意又是也等也銓也度也俗作秤云正斤両也昌孕切又昌陵切二秤俗」（去声證韻、昌三。王二、P3694表「蚩」、王一「齒證」、王三「尺證」、唐「昌孕」）、「稱知軽重也説文曰銓也又姓…處陵切又昌證切」（平声蒸韻、昌三。「切三、王一、王二、王三「處陵」）。万象名義、宋本玉篇、玄応音義なし。「凌」は広韻で「陵」と同音。この例は切韻系韻書（特に王一）との関係が推定される。

五　第三部

○不動立印儀軌鈔（一帖、第三部234号）

〔書誌等〕 鎌倉初期写、粘葉装枡型、漉返紙、「高山寺」朱印、押界、無点、原表紙、（表紙）「臺第卅」

この書に関しては、月本雅幸（一九八九）に詳しい考察があり、古辞書の引用文も主な箇所は紹介、吟味されている。

まず引用箇所を中心に本文を掲げて、次に字書類と比較し、月本（一九八九）で言及のない点を中心に述べる。

〔本文〕

（3ウ）

痿梵

玉篇云上光（ママ）丸反疼也初挙反痛也

唱言密々

謂密々者是阿波々歟即地獄受

苦之語也或師云是疊字也アナ

ワヒシト云言也口傳云アナヱナヱ云々

（4オ）

或説云梵語略也言死也又云小虫

集鳴音也又迫也

（8オ）

旋嵐猛風

玉篇云嵐盧含反山下出風也

枯涸乾焼

玉篇云枯古胡反加良木涸右

（8ウ）

角反竭也盡也乾件延反廣也

堅也

（38オ）

次説能成辯一切事業之法門

苦練木梵云和仁加木

瞿摩夷牛屎也牛糞非凡牛屎大佛頂經云雪山牛白糞塗

(38オ)

壇也世人以錫作白土名牛糞准彼牛屎

曼荼羅謂三密円満具足之義也此云壇場旦然平正形也北三胎抄下云佉木亦云佉

佉陀羅木陀羅木也倭云宇五木或云波比末由美如護摩軌者已二種木也謂佉木或佉陀羅木云々

伏蔵地中有納財之處

骨瀘草運云屈屡草唯在天竺臣唐吾朝都无之其代用活蔞草北三金抄云活魯草謂烏苽豆云々　倭名賀良須宇利也有云

(39オ)

屈蔞草皮布ツ良北三胎抄云其根遠行草也禅林記云俱婁草之皮乃奈河幾又云波比柴也

聚落十戸廿戸乃至山河限惣里

(41ウ)

現叱吒喧嗚上二字現忿之語下二字還啼歎之語

有人曰不動明王以忿怒形還作
悲泣相是故口閉也口脣非直
合既是喎僻相也為度衆生
慈悲為因還作忿怒非本意
也是故啼泣譬如有人為詞悪
子現猛悪相或縛或打而内有
悲愍欲泣尚忍也玉篇叱吒上齒

(42オ)

逸反下都嫁反噴也怒也呵也

一切経類音決云　叱吒怒也

喧嗚上於金反啼極无聲下於胡反歎辞也

観法云額現皺又懊悩六道也

随趣多思云十九観也　餘諸明王開口

現阿吒々微笑叩舌張口而是

不動明王A[2]閉其口額現皺

又是則忿怒而啼泣也

或乾陀褐色上々者火色也下々者青也黒也

戰娜迦其形如華豆和尚云青黒小豆又云野豆

婆誐鑁此云世尊又云薄伽梵々語不同也承仕行者如敬佛也是故猶如婆誐梵々云

无瘢痕上音盤古瘡處也下戸恩反訓同上

〔考察〕

◇痠**(3ウ)**　注文「光丸反疼也」を字書類と照合すると次のとおり。

万象名義「先丸反疼心酸也」(三79オ3)

新撰字鏡玉篇部分「先丸反疼也又秋旬反皮荒也皮膚麁皃之」(三75オ)

宋本玉篇「先丸切疼痠」(中9ウ)

広韻「疼痠(酸、素官切)」(平声桓韻)

---

[2] Aは糸偏に感。

反切上字「光」は「先」を誤写したもの。玉篇の逸文とすることに問題はない。

◇**楚（3ウ）**　注文「初挙反痛也」を字書類と照合すると次のとおり。

万象名義「初旅反荊也叢木也」（四25ウ6）

宋本玉篇「初挙反説文曰叢木一名荊也又國名」（中22ウ）

広韻「創挙切」（上声語韻、切三、王一、王二、王三「初挙」）、「瘡據切」（去声御韻）

反切の用字が万象名義と一致しないが、「挙」「旅」双方とも上声語韻で同じ。「楚」と同音の「礎」を万象名義で「初挙反」（六17ウ2）とするから、玉篇の用字と見ることに問題はない。また、「大漢和辞典」によるに、「楚」に「痛」の義あり（陸機・於承明作與士龍詩「慷慨含辛楚」の注に「善曰楚猶痛也」）。

◇**嵐（8オ）**

注文「嵐盧含反山下出風也」を字書類で見ると次のとおり。

万象名義なし

宋本玉篇「力含切大風也又岧嵐山名」（下13オ）

広韻「州名…亦山氣也（婪、盧含切）」（平声覃韻。切三、王二、王三「盧含」）

和名抄「嵐　孫愐切韻云盧含反和名阿良之山下出風也（箋注本一20）

反切「盧含反」は切韻諸本の用字に一致。義注「山下出風也」も和名抄所引の孫愐切韻に一致。「嵐」は宋本玉篇で「山」部所属であり、「山」部は原本玉篇が存している。しかし宋本玉篇に対応する原本玉篇の箇所を見ても、万象名義と同様に「嵐」の掲出はない。「嵐」を掲載する玉篇に依拠したと考えるの自然だが、切韻の影響を受けた玉篇に依拠したとも、あるいは切韻とすべきところを玉篇と誤記したとも考えられる。

◇**枯（8オ）**　注文「古胡反加良木」を字書類で見ると次のとおり。

万象名義「苦胡反筏也槀也」（四10オ8）

宋本玉篇「苦胡切説文曰槀也」（中22オ）

広韻「枯朽苦胡切」（平声模韻、渓一。切三、王一、王三「苦胡」）

新撰字鏡切韻部分「苦胡反加良木」（七4オ）

反切上字「古」は見母、「苦」「枯」は渓母であり、これは誤写であろう。問題は和訓「加良木」であり、新撰字鏡切韻部分と全同である。この和訓が中国撰述の玉篇になかったことはいえるが、どの段階で付け加えられたか、どのような玉篇であったのか、未詳である。

◇**涸（8オ）**　注文「右角反竭也盡也」を字書類で見ると次のとおり。

万象名義「胡雒反水渇也盡也」（五96オ2）

玉篇残巻「胡雒反國語天根見而水々涸々而成梁賈逵曰涸竭也廣雅涸盡也」（巻十九）

大乗理趣六波羅蜜経釈文「玉胡雒反廣雅涸盡也賈逵曰涸竭也」（35）

宋本玉篇「乎各切水竭也盡也」（中75オ）

広韻「水竭也下各切」（入声鐸韻、匣開一。王二、王三、唐「下各」）

新撰字鏡「胡額古角二反入竭也盡也」（六12オ）

万象名義と玉篇残巻の反切下字「雒」は「涸」と同じく入声鐸韻。反切上字「右」は「古」を誤写したものだが、「古」は見母字。「下」「胡」「乎」は匣母であり玉篇、万象名義、広韻に合わない。反切下字「角」は広韻「覚、古岳切」（入声覚韻）であり、これも万象名義や広韻に合わない。この反切は玉篇によるものとは考えにくいのだが、新撰字鏡所引の一反には合致することからすると、両者に共通の「玉篇」によった可能性はあり得る。

◇**乾（8ウ）**　注文「件延反廣也堅也」を字書類で見ると次のとおり。

万象名義「奇焉反健也天也君也夭也」（五128ウ1）、「猗塞反竭也燥也燥也」（六178ウ5）

宋本玉篇「奇焉切健也天也君也又居寒切燥也」（中87ウ）、「巨焉切又柯丹切竭也燥也燋也」（下74ウ）

広韻「字様云本音虔今借為乾濕字又姓出何氏姓苑（干、古寒切）」（平声寒韻）、「天也君也堅也渠焉切又音干九」（平声仙韻）

和漢年号字抄「東宮切韻云…孫愃云堅也運也天體也又周易卦名方西北方」（中25ウ、上田一九八四による）

所引の反切「件延反」は「件」が「其輦切（広韻、上声獮韻）」と群母であり、「奇」「巨」と同じ。反切下字の「延」は「以然切（平声仙韻）」「于線切（去声線韻）」で特に問題なし。

義注「堅也」が和漢年号字抄所引の東宮切韻中の孫愃に一致する点は注意される。

◇**叱**吒**（42オ）**

その注文「（玉篇）上齒逸反下都嫁反噴也怒也呵也」「（一切経類音決）怒也」を字書類と比較すると次のとおり。まず「叱」を見る。

広韻「呵叱也又虜複姓…昌栗切一」（入声質韻、昌開三。王二、P3694背「齒曰、王三「尺栗」、唐「呂栗」）

万象名義「齒免（ママ）反呵也」（二14オ1）

宋本玉篇「齒逸切呵也」（上50オ）

「叱」の万象名義の反切下字「免」は明らかに「逸」を誤ったもので、玉篇の逸文とすることに問題はない。

次は「吒」。

広韻「吒歎説文曰噴也叱怒也陟駕切十二」（去声禡韻、端開二。王一、王二、王三「陟訝」、唐「陟嫁」）

万象名義「都嫁反呵叱也嗔也噴也」（二14オ2）

宋本玉篇「知加陟嫁二切噴也叱怒也禮記曰無吒食謂嫌薄之」（上50オ）

観智院本類聚名義抄「吒　正叱ー怒也　イカル　ナゲク（○平濁○）（仏中39）　ツ（平）　シタウチ（平平○○）　タヽ」

玉篇からの引用文はほぼ万象名義に一致。「怒也」が万象名義にないが、宋本玉篇にもあり、所拠玉篇にはこの注があったと考えられる。

特に注目すべきは一切経類音決の逸文である。この書は、郭迻の撰、唐初期の成立である。その逸文はさほど多くないが、「字様」なるジャンルに属する書物と考えられ、今後の研究が期待されるものである。大乗理趣六波羅蜜経釈文、中算撰妙法蓮華経釈文、図書寮本類聚名義抄などに逸文がある。関連の論文は池田証寿（一九九五）を参照。

この不動立印儀軌鈔の例は、右の引用から知られるように、観智院本類聚名義抄に類似の注を見出す。観智院本の「叱ー（吒）怒也」は不動立印儀軌鈔と被注字の大きさを除いてまったく同じである。これは本来は不動立印儀軌鈔の引用のごとき形式であったものを類聚名義抄に引用する際に注の中に繰り込んでしまったのであろう。「正」の字体注が一切経類音決にあったかどうかは不明である。

「叱」は「怒也」の意味では旁を「七」に作るのが正しい。「叱」は音カ（クワ）、口を開くさまの意であるが、古くから混用されている。この箇所もそれが問題になったため、玉篇に加えて、字様である一切経類音決を引用したものと考えられる。左の図版は不動立印儀軌鈔の一切経類音決引用箇所である。

一切經類音次云　七毛悉也

苦焉上於全反苦接无聲下於胡反數等也

◇喑**嗚（42オ）**　その注文「上於金反啼極无聲下於胡反歎辞也」を字書類と比較すると次のとおり。まず、「喑」を見る。

広韻「極啼無聲又於含切（音、於金切）」（平声侵韻、影B。王三、S6187「於吟」、王二「於今」）、「啼泣無聲（諳、烏含切）」（平声覃韻、影一。切三、王二、王三「烏含」）、「聲也（蔭、於禁切）」（去声沁韻、影B。王一、王二、王三、唐、P3694表「於禁」）

万象名義「於含反大呼也」（二9オ4）

宋本玉篇「於金於甘二切啼極無聲也」（上48ウ）

次に「嗚」を見る。

広韻「嗚呼（烏、哀都切）」（平声模韻、影一。切三、王三「哀都」）

万象名義「於胡反呼歎辞也」（二21ウ3）

宋本玉篇「於胡切嗚呼歎辞也」（上52ウ）

万象名義や広韻とさほど変わらぬ内容であるが、一切経類音決によること自体は問題ないであろう。注意すべきは「上…下…」と熟語形式で注文が構成されている点である。玄応音義などの音義書にこの形式は普通であり、仏教系の字様である龍龕手鑑にもまま散見することから、一切経類音決の体例をそのまま伝える例と考えられる。

◇**瘢痕（42オ）**　「無瘢痕上音盤古瘡處也下戸恩反訓同上」を字書類と比較する。まず、「瘢」は次のとおり。

広韻「瘡痕（槃、薄官切）」（平声桓韻、並一。切三、王一、王三「薄官」）

万象名義「薄蘭反痕也痍也」（三76ウ2）

宋本玉篇「薄官切瘡痕也」（中8ウ）

玄応音義「薄寒反」（三377）、「薄蘭反」（五399）

次は「痕」である。

広韻「瘢也戸恩切四」（平声痕韻、匣一。切三、王三「戸恩」）

万象名義「何恩反腫瘢也」（三76ウ2）

宋本玉篇「戸恩切瘢痕也（中10オ）

玄応音義「胡根反」（十八490）等

この例は出典無注記であり、どのような字書・韻書に基づくのか、不明である。「古瘡處也」の部分は万象名義や広韻に見えないため、不動立印儀軌鈔に所引の一切経類音決である可能性もあるが、それを確定する材料を持たない。

六　第四部

○摩訶吠室羅末那野提婆喝囉闍陀羅尼儀軌（一帖、第四部六二函18号）

〔書誌等〕　院政期写、粘葉装枡型、「高山寺」朱印、押界、無点、原表紙、（外題）「毘沙門儀軌」（尾題）「吠室羅末那儀軌」（奥書）以二本比校示異本（別筆）「隆覚」

〔本文〕　呼召法者安置於斗柄前焼安悉香（9オ）

〔下欄〕　都耦反／聚升之／量者也

〔考察〕　◇耦　広韻「斗説文作斗十升也有柄象形石經作斗當口切斗俗」（上声厚韻）。万象名義「斗都耦反十升」、「斗」はなし。宋本玉篇「斗丁口切十升曰斗斗俗」（中54オ）。新撰字鏡玉篇部分に「斗都耦反聚升之量者也」「斗上字」とある。この箇所は原本玉篇によるものだろう。

〔本文〕　即得老若人被虵咬者（25ウ）

〔下欄〕　古爻切／鳥聲也

〔考察〕　◇**咬**　広韻「鳥聲」（交、古肴切）」（平声肴韻）、「淫聲」（顫、

於交切)」(同)、(万象名義なし、宋本玉篇「古爻切鳥聲也俗亦為齩字」(上52ウ)。宋本玉篇による。

〔本文〕 即老若人被／□螫(サク)者乾脯火中熱焼(25ウ)

〔上欄〕 舒亦反／□□□／□□蠹

〔考察〕 ◇**螫** 広韻「蟲行毒亦作螫(釋、施隻切)」(入声昔韻)、万象名義「舒亦反虫行毒也」(六91ウ2)、宋本玉篇「式亦切蟲行毒」(下43オ)。原本玉篇によるものか。

〔本文右〕 趺武反乾肉／火中

〔考察〕 ◇**脯** 広韻「乾脯東方朔云乾肉為脯／禮記曰牛脩鹿脯豕脯(甫、方矩切)」(上声麌韻)、万象名義「趺武反乾肉薄拆」(二66ウ1)、宋本玉篇「方武切脯腊也」(上71オ)。原本玉篇によるか。

〔本文〕 即日／夜常思前人護死者若得見面死不肯去怜(25ウ)

〔上欄〕 魯丁切／了也

〔考察〕 ◇**怜** 広韻「俗」(蓮、落賢切)」(平声先韻)、「心了黠皃(靈、郎丁切)」(平声青韻)、万象名義なし、宋本玉篇「魯丁切心了也」(上79オ)。宋本玉篇による。

七　おわりに

右に掲げた以外にも筆者の収集した逸文はあるが、これらの紹介は別の機会としたい。

なお、先学の言及された高山寺経蔵典籍所引の古辞書逸文を付録とした。不備の点は今後補って行きたいと考えている。

参考文献

池田証寿　(一九九五)「図書寮本類聚名義抄と類音決」(「訓点語と訓点資料」第九十六輯)

上田　正　(一九七五)『切韻諸本反切総覧』(均社)

上田　正　(一九八四)『切韻逸文の研究』(汲古書院)

岡井慎吾　(一九三三)『玉篇の研究』(東洋文庫論叢第十九)

沖森卓也　(一九八〇)「孔雀経音義について」(『高山寺典籍文書の研究』東京大学出版会)

小助川貞次　(一九九七)「高山寺蔵大乗理趣六波羅蜜多経巻七仁安元年点翻字文」(「平成八年度高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集」高山寺典籍文書綜合調査団)

近藤泰弘　(一九八〇)「高山寺蔵本草関係資料について」(『高山寺典籍文書の研究』東京大学出版会)

白藤礼幸　(一九八〇)「高山寺の古辞書」(『高山寺典籍文書の研究』東京大学出版会)

白藤礼幸　(一九九〇)「注釈としての漢文訓読」(「国語と国文学」第六十七巻第三号)

築島　裕　(一九六九)「改編本系類聚名義抄の成立時期について」(『福田良輔教授退官記念論文集』九州大学)

築島　裕　(一九八八)「改編本系類聚名義抄逸文小見」(『鎌倉時代語研究』第十一輯、武蔵野書院)

月本雅幸（一九八九）「高山寺本不動立印儀軌抄について」（「昭和六十三年度高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集」高山寺典籍文書綜合調査団）
土井光祐（一九九四）「起信論本疏聴集記に見る「聞書」の注釈書化と古辞書の利用―大広益会玉篇逸文及び改編本類聚名義抄逸文をめぐって―」（『古辞書の基礎的研究』翰林書房）
沼本克明（一九八〇ａ）「中原本論語巻四・八に引用された論語釈文の性格と論語訓読に於る影響について」（『高山寺古訓点資料第一』東京大学出版会）
沼本克明（一九八〇ｂ）「高山寺蔵字音資料について」（『高山寺典籍文書の研究』東京大学出版会）
松本光隆（一九九二）「平安時代の儀軌訓読に於ける音義の利用」（「鎌倉時代語研究」第十五輯、武蔵野書院）
馬渕和夫（一九五二）「玉篇佚文補正」（「東京文理科大学国語国文学会紀要」第三号）
宮澤俊雅（一九八〇）「高山寺経蔵典籍所載古辞書引文」（『高山寺典籍文書の研究』東京大学出版会）
宮澤俊雅（一九八五ａ）「高山寺経蔵典籍所載古辞書引文１」（「高山寺資料ノート」４）
宮澤俊雅（一九八五ｂ）「高山寺経蔵典籍所載古辞書引文２」（「高山寺資料ノート」５）
宮澤俊雅（一九八八）「高山寺経蔵典籍所載古辞書引文３」（「高山寺資料ノート」６）
宮澤俊雅（一九八九ａ）「高山寺経蔵典籍所載古辞書引文４」（「高山寺資料ノート」７）
宮澤俊雅（一九八九ｂ）「高山寺経蔵典籍所載古辞書引文５」（「高山寺資料ノート」８）
宮澤俊雅（一九八九ｃ）「高山寺経蔵典籍所載古辞書引文６」（「高山寺資料ノート」９）
宮澤俊雅（一九九一ａ）「高山寺経蔵典籍所載古辞書引文７」（「高山寺資料ノート」10）
宮澤俊雅（一九九一ｂ）「高山寺経蔵典籍所載古辞書引文８」（「高山寺資料ノート」11）
宮澤俊雅（一九九二）「高山寺経蔵典籍所載古辞書引文９」（「高山寺資料ノート」12）
宮澤俊雅（一九九五）「高山寺経蔵典籍所載古辞書引文10」（「高山寺資料ノート」13）
三保忠夫（一九八八）「新撰字鏡小論」（「島根大学教育学部紀要（人文・社会科学編）」第二十二巻第一号）
三保忠夫（一九八九）「「玄証本」と新撰字鏡」（「昭和六十三年度高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集」高山寺典籍文書綜合調査団）

4.076.062 宮澤 1989c
4.076.106 宮澤 1989c
4.076.121 宮澤 1989c
4.077.036 宮澤 1989a 宮澤 1989c
4.079.097 宮澤 1989a
4.081.019 宮澤 1989a
4.087.012 築島 1988 宮澤 1989b
4.097.025.004 宮澤 1980 宮澤 1989b
4.097.079 宮澤 1980 宮澤 1989b
4.097.153 宮澤 1989c
4.097.162 宮澤 1989b
4.098.111 白藤 1980 宮澤 1980 近藤 1980 宮澤 1989b
4.098.141 近藤 1980 宮澤 1991a
4.098.210 宮澤 1989c
4.098.251 近藤 1980 宮澤 1991b
4.103.002 白藤 1980 宮澤 1980 築島 1988 三保 1988 宮澤 1991a
4.106.002 宮澤 1989c
4.115.024 白藤 1980 宮澤 1991a
4.115.068 白藤 1980 宮澤 1980 宮澤 1991a
4.115.083 白藤 1980 宮澤 1991a
4.118.011 宮澤 1980 宮澤 1991a
4.118.061 白藤 1980 三保 1988 宮澤 1991b
4.124.009 宮澤 1991a
4.138.024 白藤 1980
4.139.018 宮澤 1980 近藤 1980 三保 1988 宮澤 1991b
4.139.034 近藤 1980
4.146.037 宮澤 1980 近藤 1980 宮澤 1991b
4.148.079 宮澤 1980 宮澤 1989c
4.151.031 三保 1989
4.156.001.024 宮澤 1989c
4.157.030.006 宮澤 1991b
4.164.019 近藤 1980
4.171.019 宮澤 1980 宮澤 1991b
4.172.003.003 宮澤 1980 宮澤 1991b
4.172.014.032 三保 1988 宮澤 1991b
4.185.135 近藤 1980
4.188.042 近藤 1980
4.189.021 宮澤 1991b
4.189.038 白藤 1980 宮澤 1991b

付録　諸先学の取り上げた高山寺経蔵典籍所引古辞書逸文

部（函）号

1.003　三保 1989
1.021　宮澤 1992
1.030　宮澤 1985a
1.031　三保 1989
1.032　宮澤 1985b　三保 1988　築島 1988　三保 1989
1.148　宮澤 1985a
1.154　宮澤 1980　近藤 1980　宮澤 1985a
1.156　宮澤 1985a
1.160　宮澤 1985a
1.165　宮澤 1985b
1.191.003　宮澤 1992
1.275　宮澤 1992
1.292　宮澤 1992
2.003　三保 1989
2.057　宮澤 1985b
2.061.001　宮澤 1980　宮澤 1985a
2.093　宮澤 1992
2.098　宮澤 1995
2.125　宮澤 1995
2.147　宮澤 1980　宮澤 1985a
2.152　白藤 1980　宮澤 1985b
2.206　白藤 1980　宮澤 1980　宮澤 1985a　築島 1988
2.280　白藤 1980　宮澤 1980　近藤 1980　宮澤 1985b
3.041　宮澤 1995
3.042　宮澤 1995
3.201.004　宮澤 1980　宮澤 1988
3.234　宮澤 1988　月本 1989
4.034.013～019　三保 1988　小助川 1997
4.048.002　宮澤 1988
4.053.084　宮澤 1995
4.053.164　宮澤 1989c
4.053.390　宮澤 1980　近藤 1980　宮澤 1988
4.062.114　三保 1989
4.062.121　宮澤 1988
4.063.023　宮澤 1995
4.063.035　白藤 1980　宮澤 1980　宮澤 1988
4.066.014　宮澤 1988
4.066.015　白藤 1980　宮澤 1988
4.067.026.007　宮澤 1980　沼本 1980
4.075.034　白藤 1980　宮澤 1980　宮澤 1988